No.12 October 1993

▲▲▲ 京都大学農学部国際交流 ▲▲▲

News Letter

Foreign Student Service, Agriculture

大学における国際交流

重 永 昌 二

（京都大学名誉教授・熱帯農学専攻）

大学における国際交流にはいろんなかたちがある。研究協力や共同研究があり，また受け入れ身分も留学生や招へい研究者などさまざまであるが，いずれも異文化を背景にもつ外国人との日常的な接触を伴う。

普通われわれは同質の文化をもつ自国内で生活することに慣れているため，異国民とのつき合いには大なり小なり緊張を伴うものである。まず第一に言葉に共通性がないために意志の疎通が思うようにできない。このような場合，現代の国際社会では一般に英語が共通語と考えられているから，互いに英語で意志の疎通をはかろうとすることが多い。従って英語は現在大学人が国際交流を行う上の必要最小限の手段である。

しかし英語が話せればそれだけで国際交流がうまく行くかといえば，そうとは限らない。国際交流を長続きさせるためには，それ自体がもつ意図や期待が明確でなければならない。国際交流の意図ないし価値，あるいは期待とは何か。それは国際交流のかたちによって違ってくるが，基本的には相手国の本当の姿とか本当のこころをよく知ること，よく理解しようとすることにあるといえる。ある程度の見聞だけでその国や国民性のことを知っているつもりでも，本当は十分理解していないことが多い。その国の文化に根ざした人々のこころをより深く理解するには，自らの交流体験の蓄積が必要である。近年交通手段や通信技術の発達により異文化が互いに影響を受け合って，とくに世界の主要都市では多くの点で共通性がみられるようになってきているが，これがそのまま異文化が同質化しつつあると早合点することはできない。異国人との交流によってその姿やこころがよりよく理解できてくることは，それだけでも楽しみであり，価値のあることである。これを特定国だけに限定せず，できるだけ交流の範囲を拡げて行くことが大学においては必要ではないか。

学術は人類共通の財産である。従って学術研究の府である大学は，本来国際交流の場としての性格を備えているものなのである。科学技術分野では万国共通の学術用語を用いて研究を進める方向に急速に向いつつある。大学が国際交流の恰好の舞台になることは，けだし理の当然である。門戸は常に諸外国に向けても開いていなければならない。

ただし留学生の受け入れに当っては，そのことによって研究室の資質が高められるような，優秀な留学生を受け入れる努力が必要であろう。そのためには，例えば大使館推薦の過程で課される競争試験をパスして来るとか，何らかの信頼のおける筋からの推薦に依拠すべきであって，単に留学を希望する者自身の申し出だけですぐに大学推薦の手続きへ持って行くのは好ましくない。

また招へい外国人学者や外国人共同研究者を受け入れる場合も，そのことによって研究室の活気が高められる方向での受け入れを常に心掛けることが大切であろう。そのような学者や研究者を迎え入れるためには，研究室の雰囲気をたえず国際化の方向へ動かして行く努力と研究水準の向上や活気の醸成に対する努力が必要である。外国からの来訪者を単に日本の空気に馴染ませようとするだけでは大学の国際交流としては物足りない。

国際交流の一つの形態に国際技術協力というのがある。協力というと，常に協力を求める立場と協力を提供する立場がある。ODA（政府開発援助）予算によって行われる国際技術協力は，途上国からの援助要請を受けてわが国が経済または技術援助を提供するという基本的な形をとる。この協力の範疇で，近年途上国の大学に対する研究協力プロジェクトが増えてきている。これは国際共同研究や海外学術調査研究などと違って，その大学の強化が目的である。この目的を達成することはさほど容易なことではないが，JICA（国際協力事業団）専門家として途上国の大学へ派遣された日本の研究者達が熱心に研究に取組む姿勢が自然と途上国のカウンターパートへの技術移転となり，究極的にはその大学の強化に連がると考えられる。このような国際協力は，大学から人材を派遣するほかに道がない。一見奉仕に終始する活動のようにみえるが，長期的観点に立てば，例えば留学生や招へい研究者の交流強化に連がるなど，国際交流への大きい役割を果たすことは明らかである。大学が国際協力事業に参画する意義もここにある。

大学における国際交流のあり方は，広く国際的に門戸を開くことによって自らの資質向上に連がり，さらにそれが次の留学生や研究者の質的な上昇を招くという方向で発展することを希っている。

和やかな雰囲気のなかで自己紹介の順番を待つ新入留学生
（本年4月の歓迎パーティ。関連記事は p.3 留学生室ニュース）

見学旅行（和歌山・三重，7月20～22日）
参加者の一口印象記

今年度の農学部留学生見学旅行は，和歌山県串本町にある京都大学農学部亜熱帯植物実験所，串本海中公園，同太地町のくじら博物館を訪ね，三重県の伊勢神宮を見学しました。旅行の様子や雰囲気を知っていただくために，参加者の感想を載せてみました。

童　亜明
（農林経済学，中国）

この短い旅行でいろいろなもの，太平洋沿岸の美しい景色，日本人の食文化，旧来の歴史などを見学した。ほんとうに勉強になった。

苗　登明
（農芸化学，中国）

日本の社会・文化・制度などの事情をよく理解することも私の日本留学の目的の一つである。今回の見学旅行はそんな私にとって，本当に貴重な体験であった。伝統的な文化と豊かな自然に包まれた南紀，伊勢方面を訪れて，そこに住む人々の人情や勤勉な姿は私の心に深い感銘を与えた。それに加えて，諸国からの留学生たちと知り合えて，日本以外の国のことも知ることができた。

藩　慶華
（農学，中国）

保鯨―捕鯨または伝統―現代のような両立のことをうまく調和させ，これは日本人の上手さでもあれば，われわれ外国人にとって学ぶに値するところでもあると思う（和歌山県太地くじら浜公園にて）。

日本人の心のふるさと―伊勢神宮を見学して一番印象的なことは，「日の丸」がその中に高く掲げられていること，日本最古の建築と言われる「唯一神明造」の社殿を見せてくれないこと，そこで祭神している神様が20年ごとに新宮に「引っ越し」することであった。まさに，Japan is it.（伊勢神宮にて）。

李　樹華
（林学，中国）

見学旅行をして，日本の美しい景色，文化，知識，民俗など心中に深く残っている。特に，海中動物類，海底生態，亜熱帯樹木，くじらの生活史などを勉強した。そして私の専門（造園植物）に関する植物の地理分布と樹木の形態について少し勉強できた。

王　玲
（農学，中国）

私は初めて海を見ることができて，ほんとうに興奮した。特に，串本海中公園でグラスボートに乗り，また海中展望台を通して海中世界を観察することができた。例えば，海の世界にも陸地世界のように，魚達に嫌がられる海中雑草があること，魚たちはわれわれ人間のように縦社会を作って生活していること，深水層で生活している魚は偉い，またはその反対であると認められていること等々。日本を正確に理解する一助になったことは言うまでもない。

于　海業
（農業工学，中国）

肌の色の違う21名の留学生と，本当に楽しい3日間を送りました。忙しい研究とか辛労な勉強から離れ，日本の社会に入って，見たり，聞いたり，考えたり，やはりいい学習だと思います。海浜の串本町に立って，太平洋に向かって，心が広くなるという感じがしました。海中公園の海中タワーとグラスボートで海の中を見ました。海草，いろいろな魚，きれいな岩など夢のような海中世界です。くじら博物館の見学では，かわいいくじらの演芸はとても面白く，深い印象を残してくれました。海のそばに立って，波の音を聞いて，遠いところを見て，いろいろな感想がありました。一言で言えば，海が大好きだということです。伊勢神宮を見て，日本の歴史に接触するという感じがしました。

毛　躍克
（農林経済学，中国）

はじめて出かける日本での旅行でしたので，大変うれしかったです。3日間という短い見学旅行でしたが，感想がいっぱいです。串本海中公園や亜熱帯植物実験所では，色々な魚と技術をみることができました。そして，非常にきれいな景色があちらこちらに見られました。旅行中は日本の食文化にふれられ，ホテルでは色がきれいで芸術的な和食を食べました。

Hasan Riaz
(Agricultural Chemistry, India)

I have learnt a lot from this study oriented trip and for me, it's rather difficult to note all those beautiful experiences in brief. But I must tell one thing that God has gifted the beauty to this world everywhere in the same proportion and it's upto the people of every country to take care and think about it and in my opinion, the way, the Japan, and her people taking interest to conserve its resources, beauty and environment is really great and beyond the imagination.

姜　成求
（農学，韓国）

3日間，日本の本州の最南端を含めてあちらこちら見学をした。疲れも溜まって，帰りには眠ることしかできなかったが，太地のあの風景と，海沿いの景観は決して忘れられないであろう。日本文化と地理の多様性が再び分かるようになった。

李　守馥
（食品工学，韓国）

日本に留学のために来てからはじめての旅行でしたから，大きな楽しみでした。行く先々は好奇心と新しさが満ち，さらにきれいな自然を見ることができました。くじら博物館がある太地へ行きました。そこには，遠くからだぶだぶ揺れながら近づく太平洋の波とそれを迎える岩場や小島がつくりだす太地のきれいな風景にはだれもが感動されると思います。ここのすばらしい自然の中でいろんな生活と休息空間がうまく調和しているのを見て，日本の知恵を感じることができました。伊勢神宮には多くの人達が団体で来ていました。境内で巡礼している彼らのまじめさと敬虔な態度から伝統を大事にする日本の心が見られるように思いました。

金　成埈
（農林経済学，韓国）

In 3 days, we made a trip around Wakayama and Mie Pref. It was very short time, but the trip was benefitable and enjoyable. Especially, the second day's hotel was good and comfortable, because of the good scenery and convenient facilities. And the Ise Grand Shrine was very impressive. But it was regrettable that I did not have enough knowledge to understand the Shrine's history.

金　大燮
（林学，韓国）

電車の中で，初めて出会う外国人留学生と交わした話は楽しいものがあった。最初の日の夜，話は盛り上がり，各々の国の話，日本の文化・自然等々。夜が更けるのも忘れた。「くじら博物館」への見学。鯨の骨，捕鯨船と捕鯨のための道具，「鯨―show」等々，大人になって見るそれはものすごく不思議なものであったし，興奮してしまった。3日目は伊勢神宮見学。こんもりとした美しい森林，自然を楽しむことはすばらしいものがあった。研究は言うまでもないが，日本のありのままの美しい自然―都市，田舎，

新しい留学生室担当講師

宇佐見晃一氏のプロフィール

留学生室は，本年4月1日付けで京都大学留学生センターに転任された岡川長郎先生の後任として，本大学農学部農林経済学教室の助手であられた宇佐見晃一氏を6月1日付けで迎えました。

宇佐見晃一氏は，東南アジアと南アジアにおける小農経営の発展および農村開発というテーマのもとで，大学院博士後期課程から助手時代にかけてフィリピン，タイ，マレーシア，インドネシアを調査訪問され，最近は特にバングラデシュを対象に農村経済および農家経済の調査を通した研究協力に従事されています。これらに加えて，大学卒業後の2年間にはフィリピンでのボランティア活動を経験されており，海外経験豊かな方です。また，前に所属された農林経済学教室（農業計算学講座）のゼミでは，ネパール，イラン，バングラデシュ，中国，インドネシア，フィリピンからの留学生の研究指導の補助をされ，留学生室担当教官として頼もしい人材です。先日留学生室が行いました留学生見学旅行を引率していただいた時，さりげなくそして友達のように留学生と話されていた姿には，今までの経験がほうふつされているのが感じられました。

農学部留学生室は開室後8年となり，益々の国際化の時代のなかで，留学生の数が増える傾向にあります。ここに若さと幅広い経験，そして社会科学系の素養を持った宇佐見先生には，留学生室教官としての活躍を大いに期待したいと思います。

（野渕　正
農学部留学生室講師）

高原地帯一が楽しめる機会を持ちたい。そうすることによって初めて，日本の人々と文化が理解できるだろう。留学の本当の目的と留学生活の本当の価値がそこにあると，今回の旅行を通じて考えるようになった。

金　翰　泰
（農業工学，韓国）

この見学旅行は，私には日本での初めての旅行でしたから，とても大きな期待がありました。3日間の旅行中で特に「くまのじ」での夜が一番印象的でした。また大島，串本の海と島の美しい自然を見たことが大きな幸運でした。農学を一緒に勉強する留学生との対話によって，やはり世界は1つであることを感じました。

A. Bob Karnuah
(Animal Science, Liberia)

The trip was a very interesting and exciting one. It afforded me the opportunity to get exposed to marine life and activities, and equally so increasing my understanding about the Japanese society and culture. The visit to Wakayama Pref. took us to the Kushimoto Marine Park and a unique Whale Museum. There we were entertained to some wonderful performances by the dolphins and the killer whales. In Mie Pref., the visit to the Grand Shrines of Ise was a wonderful experience. Besides, I had a relaxing time with colleagues; sharing ideas and fun.

Nick G. Guanzon, Jr.
(Tropical Agriculture, Philippines)

The trip was really a worthwhile experience. It offered me a good chance to see some gorgeous places in Japan. At the Kushimoto Marine Pavillion, I was fascinated by the marvelous colors and shapes of tropical fishes, sea anemones, starfishes, sea urchins and sea lilies kept in big aquaria. Whereas at the Taiji Whale Museum and Park, it was also a wonderful experinece to watch the very intelligent sea mammals (dolphins and sea lions) exhibiting a variety of talents. Last day of our trip, we visited the Ise Shrines. These places perceives and acquainted me with some parts of Japanese history.

Chitra Wendakoon
(Fisheries, Sri Lanka)

This is my first trip to Wakayama area and it was a very interesting one. Particularly, I enjoyed the train ride along the pacific coast. Among the places we visited, the Whale Museum in Taiji is a really worth place to see. After enjoying the whale show, which was very admirable, we tasted kujira meat on the same day. A rare chance for all of us, I suppose. Apart from the visite to Oshima Island, where we could not see anything special but only the big camelia trees, all the other places we visited were very impressive.

Pornthiwa Kanyawongha
(Tropical Agriculture, Thailand)

Interesting trip. Enjoyed very much and learned a lot from sites visited. Good chance to communicate with other foreign students. It was a nice experience. Thanks for everything.

M. Hakki Alma
(Wood Science and Technology, Turkey)

With this study tour, I especially got many new friends who came from several kinds of country. Before I attended to the study tour, I'd got very simple imagination about scene of Japan. But, now my idea on the nature of Japan changed after going Wakayama, Kushimoto, Oshima, Ise and so on. By the tour, I've learned some tradition and religion arts which are most important things in the life of us and many kinds of coloured-fishers. Japan was created by God very sensitively and kept out from enemy via typhoon.

アリスティムニョ・イグナシオ
（林学，ヴェネズエラ）

串本マリン・パークでは船で海の世界を見学しました。その日は，京大農学部の亜熱帯植物実験所に宿泊し，おいしい夕食の後で，みんなロビーに集まって話し，楽しく過ごしました。いろいろな国の人といろいろな視点から議論ができ，色々な新しいことを学びました。

有名なくじら博物館では，イルカとオルカのショーを見ました。そして，海岸を散歩し，変化に富んだ岩場の続く日本らしい景色を見ることができました。

最後の日は，伊勢神宮で日本の伝統的な建物を見ることができてとても良かったです。ここでは，国に帰ったとき，建築について話すことができるように，たくさんの写真をとりました。

留学生室ニュース

新入留学生のためのオリエンテーションと歓迎パーティー

今年度は23名の新入留学生を迎え，4月12日に恒例のオリエンテーションと歓迎パーティーを開催しました。オリエンテーションに引き続き，歓迎パーティーは農学部大会議室において約160名の参加をえて盛大に行われました。農学部国際交流推進後援会の援助の他，アサヒビール，京大生協，キリンビール，月桂冠，サッポロビール，雪印乳業から御高配を賜りました。ここに記して感謝いたします。

見　学　旅　行

農学部留学生室が学生部の援助を得て企画・実施する平成５年度の見学旅行では，７月20日から22日にかけて，総勢23名で和歌山県南部と三重県伊勢市を見学しました。１日目は串本海中公園と京都大学農学部附属亜熱帯植物実験所，２日目は太地町のくじら博物館，３日目は伊勢神宮を訪ね，自然美や文化を通して日本の理解を深めるとともに，車中や宿舎では日頃会うことの少ない国の違う留学生が互いに交流することができました。

見学旅行初日に宿泊施設を提供していただいた附属亜熱帯植物実験所の梅本先生には大変お世話いただきました。紙上を借りてお礼申し上げます。

農学部国際交流推進後援会の会員加入について

本年も６月に平成５年度の会員加入のお願いを御案内しました。この呼び掛けに対して学内および学外の多くの方々（８月末日現在で161名，４団体）からご賛同を頂いております。なお，同後援会についてのお問い合わせは留学生室宛にお願いします。

ア・ラ・カ・ル・ト

私費外国人留学生の大学院修士課程入試状況

９月１日から３日にかけて実施された平成６年度の大学院修士課程の学生募集では，農林経済学専攻１名（中国），水産学専攻１名（韓国）の計２名の私費外国人留学生が合格しました。

ウィスコンシン大学への派遣留学生

平成５年度文部省学生交流制度に基づく農学部からのウィスコンシン大学への派遣留学生には，応募者がありませんでした。

農学部留学生数の動き

平成５年度は14カ国から23名の新しい留学生をむかえましたので，彼等・彼女等の名前，国籍，所属研究室を紹介します。大学院生・学部学生の皆さん，まずは日常の挨拶からはじめて，彼等・彼女等に積極的に話しかけてください。また，先輩留学生の皆さんもいろいろな相談に乗ってあげてください。

H. M. Zakaria	（バングラデシュ，農業施設工学）
S. M. L. Rahman	（バングラデシュ，植物光生化学）
P. C. Crooker	（チリ，水産微生物学）
A. M. Barreto	（コロンビア，食糧貯蔵加工学）
H. Elshazly	（エジプト，農業施設工学）
A. Gassa	（インドネシア，農薬生物学）
D. R. Dewanti	（インドネシア，地域計画論）
S. Gandaseca	（インドネシア，林業工学）
I. R. Sajuri	（インドネシア，農産加工機械学）
I. Lubis	（インドネシア，作物学）
U. B. Santosa	（インドネシア，砂防学）
R. Natawigena	（インドネシア，農業計算学）
A. Arzate	（メキシコ，育種学）
Z. L. Tun	（ミャンマー，農業施設工学）
N. Trillana	（フィリピン，作物学）
S. P. Bandara	（スリランカ，栽培植物起原学）
R. Kongkachuichai	（タイ，新食品設計学）
A. M. Hakki	（トルコ，木材加工材料学）
B. J. Louis	（アメリカ，雑草学）
王振	（中国，農政学）
陳大夫	（中国，林政学）
陳暁飛	（中国，かんがい排水学）
林蓮貞	（中国，木材加工材料学）
王玲	（中国，雑草学）
王桂芝	（中国，実験遺伝学）
張玉林	（中国，農学原論）
張越傑	（中国，農業簿記学）
梁励	（中国，家畜栄養学）
毛躍克	（中国，農史）
干海業	（中国，農用作業機械学）
孫志偉	（中国，食品化学）
金光植	（韓国，家畜繁殖学）
金成埰	（韓国，農業経営学）
申美仙	（韓国，水産微生物学）
李守馥	（韓国，酵素化学）
金銀洙	（韓国，微生物生産学）
林治煥	（韓国，生物調節化学）
金大燮	（韓国，造園学）
金翰泰	（韓国，水利工学）
金武燦	（韓国，水産微生物学）

本年８月末日現在，農学研究科には35カ国96名の大学院留学生（うち修士課程27名），農学部には３カ国15名の研究生留学生，２カ国２名の留学生が在籍中であります。このうち65名が日本政府国費留学生（修士課程20名）です。平成４年度に課程等を修了されて学位（修士，博士）を取得された留学生は修士９名，博士21名でした。

農学部国際交流委員会メンバー

本年７月１日付けで，本学部の代表として京都大学の国際交流に尽力いただいた岡村圭造教授（林産工学教室）に代わり，外村辨一郎教授（食品工学教室）が京都大学国際交流委員会委員に就任されました。この機会に，これまであまりお知らせすることのなかった農学部国際交流委員会の委員である諸先生方を紹介します。

久馬一剛	（学部長）
常脇恒一郎	（評議員）
外村辨一郎	（京大・国際交流委員会委員）
杉浦明	（農学）
小橋澄治	（林学）
池田篤治	（農芸化学）
泉井桂	（農林生物学）
池田善郎	（農業工学）
藤谷築次	（農林経済学）
石田祐三郎	（水産学）
白石信夫	（林産工学）
熊谷英彦	（食品工学）
佐々木義之	（畜産学）
渡辺弘之	（熱帯農学）
桒原保正	（農薬研究施設）

Study Tour: at Kushimoto Marine Pavillion
見学旅行：串本海中公園にて

発行所　京都市左京区北白川追分町
京都大学農学部留学生室
電話（075）753-6298，6299
印刷所　京都市上京区下立売通小川東入
中西印刷株式会社
電話（075）441-3155～8